

クマ出没、AIで警報

煩雑な目視作業なし

サンコーコンサルタント

サンコーコンサルタント（東京都江東区、柿崎勉社長）は、人工知能（AI）を活用したクマの警報システムを開発した。国営公園内に設置した通信機能付きセンサーカメラと、クマのAI画像抽出プログラムを組み合わせた。これまではセンサーカメラが撮影して電子メール送信した画像を人間が1枚ずつ目視で確認しており、多くの労力と時間を要していた。新システムで作業の大幅な効率化が期待できる。シカやイノシシなど、ほかの害獣への応用も検討する。



通信機能付きセンサーカメラと、クマのAI画像抽出プログラムを組み合わせた（展示会でのデモ）

画像抽出・通信機能付き

クマは登山者や観光客を襲う可能性があるため、国営公園内に侵入が確認されると追いつき、目視確認の煩

雑さに加え、センサーカメラがシカやサル、イノシシなどクマ以外の動物や通りかかった人間を撮影してしまう

ことも多いといった課題があった。新システムではAIにクマの画像データを学習・記憶させることで、こうした問題を解決する。

AIにクマとそうでない動物の違いを覚えさせるには、学習データが多数必要になるため、年数枚程度の画像では難しい。サンコーコンサルタントは国営公園の管理で長年の実績があり、ツキノワグマの画像データを多く所有するため、システム化が可能になったとしている。

シカやサルなら大きさや体形でクマと区別できるが、イノシシのように難しい例も「夜間に撮影するとクマは黒色だがイノシシは茶色なので、容易に区別できる」（サンコーコンサルタント）。長野県内の公園管理事務所に実証を兼ねて納入済みで、今後はほかの公園での活用や、クマ以外の動物向けの開発を進める。